LC
りぽーと
Vol. 35

〒663-8558　西宮市池開町6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
TEL　0798(45)3536
FAX　0798(45)3574
http://www.mukogawa-u.ac.jp~ILC

旅の文章はどう書くか

今回のリポートのテーマは「旅」です。旅行雑誌には、どういった内容が、どのように書かれているか、その文章にはどのような特徴があるのか、という点を中心にお届けします。レポートを読めば、きっとあなたも旅の記事が書けるようになる（かも）。旅行雑誌記事の指南書を目指してみました。

資料とした雑誌

「旅行読売」2011年発行（旅行読売出版社／月刊／480円）

１月号「にっぽん歴史旅」　　４月号「絶景露天100」

７月号「東京・名古屋・大阪さんぽ」　　11月号「ひとり旅」

対象データ

各号に「第１特集」として組まれている中で、カラーページに相当する記事の全文を対象とした。カラーページからモノクロページに続いている場合は、そのモノクロページについても全文をデータとした。各号の特集には、複数の旅先が取り上げられており、たとえば、１月号には、次の５箇所がカラーページとして特集されている。

川浦、下部温泉（山梨県）/水戸、大洗（茨城県）/彦根城（滋賀県）/関（三重県）/日光山内（栃木県）

同様に、４月号（６箇所）、７月号（５箇所）、10月号（６箇所）である。

各号のセンテンス数は次の通り。

１月号：299文　４月号：184文　７月号：171文　10月号：372文　計1,026文

１.「旅」文章の必須要素

ひとまとまりの旅の記事には、さまざまな情報が記されている。その情報は、観光地ごとに、まったく異なった内容が書かれているように思える。もちろん、具体的な土地や場所、施設は違っている。しかし、どのような情報が、どういった構成で書かれているのかという視点で見てみると、旅の文章は、ある一定の型を備えたパーツの集まりであることが分かった。文章を構成する「定型パーツ」である。それが次に示すＡ～Ｅである。

書こうとする土地や施設について、パーツごとに材料を揃え、それをもとに文章を

作成し、それらを組み合わせていけば、ひとつの文章がほぼできあがる。Ａ～Ｅは、旅の文章における必須要素なのである。それぞれについて見ていこう。

【パーツＡ】目的地への交通手段や所用時間の説明

出発地から目的地まで、どのような乗り物を利用するのか、それにはどれくらいの時間がかかるのか、という情報を説明しているものである。特に、大都市圏から離れている旅先の場合にこの説明がなされている。文章の冒頭に出現することが多い。

・新大阪駅から熊本駅まで山陽　　・九州新幹線みずほで３時間。
・塩山駅から路線バスで10分ほどだ。

【パーツＢ】目的地へのルート説明やライターの行動説明

Ａとよく似ているが、Ａがマクロな旅行スケジュールの説明とすれば、こちらは、どのような道をどんなふうに移動するか、ミクロな説明である。多くの場合、ライターがどのように移動したかを説明しており、時間の経過に沿った記述がなされている。

・東海道線彦根駅から駅前お城通りを西へ歩く。
・車で向かう場合、途中、笛吹川フルーツ公園を通り抜けるため少し分かりづらいが、案内板に沿って進む。
・京成橋を渡り、北十間川沿いを歩く。
・コレクションズカフェ　ラゲンでひと休みして、窯元が集まる一之倉地区へバスで向かう。

【パーツＣ】メインの観光地や施設等についての描写

当該観光地について、歴史的背景を説明したり、建築物の描写をしたりしているものであり、旅の文章の中心的存在である。メインであるこのパーツＣの記述に、パーツＢやこの後説明するパーツＤ・Ｅが随所に入り込みつつ、時間軸に沿って旅が進んでいく。

また、ひとつの旅におけるメイン観光地は一箇所ではない。よって、次の一続きの例のように、パーツＣ・Ｂ・Ｄが組み合わされたブロックが何度か繰り返される。

関宿を代表する旅籠だった玉屋は関宿旅籠玉屋資料館として内部公開されている【Ｃ】。展示品の一つ、1810年刊行の「旅行用心集」は興味深い【Ｃ】＋【Ｅ】。江戸後期の旅の様子を伝えるもので、宿で蚤を避ける方法などが記されている【Ｃ】。さらに西へ歩くと関地蔵院の境内が広がる【Ｂ】。東大寺大仏が開眼する少し前の741年、僧行基が地蔵菩薩を安置したのが始まりという【Ｃ】。徳川家ゆかりの古刹と知り、住職を訪ねた【Ｂ】。関はそもそも関地蔵院の門前町としてにぎわっていた【Ｃ】。３代将軍・家光の側室、桂昌院も関地蔵をあつく信仰していたと伝わる【Ｃ】。その徳を得てか、後の５代将軍綱吉を産んだと言われている【Ｃ】。「本堂は綱吉の寄進。防火用水と思われる石がめに、葵の御紋が彫られています」と17代住職の酒井崇雅さん（36）が教えてくれた【Ｄ】。

（１月号／特集名：徳川家ゆかりの逸話が多い格子の家並みを歩く）

【パーツＤ】施設等関係者や観光客の話を引用

その土地の施設関係者や観光客の話を直接引用しているもので、出現する回数（文）は、次に示したように比較的多い。

１月号（15文）　４月号（10文）　７月号（６文）　10月号（26文）　計57文

・おかみの依田由有子さん（50）は「先生はこの湯を気に入ったようで、永井龍男さんや安岡正太郎さんにボトル入りの温泉を贈られていました」

・ほったらかし温泉のスタッフ・田口美郷さん（31）の話では、待つ人が500人を数えた日があったそうだ。

【パーツＥ】旅愁・筆者意見

データとした文章は、客観的事実を述べている文がほとんどで、書き手の主観的意見や感想が述べられている文は少ない。だが、抒情的な表現や旅の感想などは、必ず数文含まれている。これらは、文章のまとめとして述べられる場合が多い。

・鮮やかな夕日に染まる太平洋の美しさは激動の幕末も今も変わらない。

・食べ歩きもいいし、雑踏の中にたたずむのもいいだろう。

・ひとり、のんびりと悠久な時の流れの中に身を任せたい。

２．表現テクニック

さて、読者を引き付け、旅情をかきたてる方法として、表現テクニックには、どのような工夫がなされているだろうか。今回のデータからは、ふたつの特徴が認められた。ひとつは、文末に体言止めと言いさし文が散見されたこと。もうひとつは、事実を伝える役割をもつ文が多いことである。

２．１　体言止めと言いさし文

表１	体言止め		言いさし		
号（センテンス数）	出現数	%	出現数	%	～へ。（Ｂ）
１月（299文）	56	18.7	19	6.4	14（13）
４月（184文）	41	22.2	6	3.3	５（４）
７月（171文）	32	18.7	10	5.8	９（９）
10月（372文）	58	15.6	19	5.1	18（18）
計（1,026文）	187	18.2	54	5.7	46（44）

まず、体言止めと言いさし文の出現回数とその割合（%）を表１で見ていこう。特に、体言止めは、各月15%以上であり、好んで使用されていることがうかがえる。

・タクシーを呼べば、平湯大滝公園まで４分。

・建物は古い庄屋屋敷を移築した民芸調。　・泉質は63度の単純温泉。

一方、言いさし文の出現数は、体言止めほど多くないが、面白い特徴がある。それは、ほとんどの文末が、「～へ。」という形をとっていて、かつ、パーツＢのルート説明／ライターの移動を述べる文として使用されていることである。

表の右端列の数値は、言いさし文のうち、文末が「～へ。」の形の実数で、カッコ

内の数値は、「～へ。」のうち、パーツＢに相当する文の数である。例を挙げておこう。

・部屋に荷を解いたら、さっそく自慢の露天風呂へ。

・ひさご通りから六区ブロードウェイへ。

・駅前のレンガ坂を上り、神宮前の参道へ。

これらのテクニックを用いることにより、文章のリズムを歯切れよくしたり、文章に余韻を持たせたりといった効果がねらわれていると考えられる。

２．２　事実を伝える文

旅の文章には、どのような役割をもつ文が多いかという視点で、一文ごとにチェックを行った。先のパーツＥの箇所でも少し触れたが、旅の文章では、事実を伝える文が圧倒的に多い。結果は、表２に見るように、１月、７月、10月で、８割以上が事実を伝える文となっている。

表２	事実		事実以外		事実+意見	
号（センテンス数）	出現数	%	出現数	%	出現数	%
１月（299文）	268	89.6	15	5.0	16	5.4
４月（184文）	122	66.3	37	20.1	25	13.6
７月（171文）	142	83.0	11	6.4	18	10.5
10月（372文）	305	82.0	37	10.0	30	8.1
計（1,026文）	837	82.4	100	9.0	89	8.7

客観的な事実を表し、主観が混じっていない文を「事実」、「事実以外」の文とは、ライターの主観的意見や推量、伝聞などである。「事実+意見」というのは、一文の中に、事実と意見とが混じっているもので、たとえば、「案内のアナウンスとともに列車は停車し、ゆっくり写真撮影ができるのがうれしい。」のような文を指す。「案内のアナウンスとともに列車は停車し」という事実と、「うれしい」というライターの意見が混在している文である。

旅の文章の必須要素として挙げたＡ～Ｅのうち、Ｅを除くＡ～Ｄの４パーツは、事実を述べることが求められる文であり、意見より事実の役割をもつ文が多くなるのは、当然の結果と言えるだろう。

旅はどのように評価されているのだろうか、という疑問が調査の出発点でした。しかし、データをとってみれば、旅行雑誌の記事は、書き手が「評価」を与えているのではなく、「事実」を淡々と列挙しているものが多く、「評価語」はほとんど現れません。そこで、先入観を捨て、データを眺めているうちに、定型パーツが浮かび上がってきたわけです。定型パーツと文章構成、表現テクニックをマスターすれば、あなたも旅行雑誌のライターになれるかも?!

担当：佐竹秀雄・岸本千秋　2012年10月
作業協力者：難波明日香